

小學修身書

初等科之部
首卷

K110,1
235J
1

K110.1

235J

明治十六年六月印行

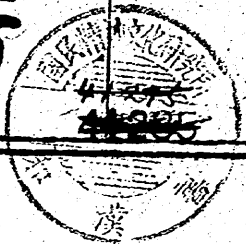
小學修身書

文部省編輯局



初等科首

41280



41280

修身書

小學修身書首卷

教師須知六則

德積重
遠藏書

一此書ハ古語俚諺及び和歌等と集め録して小

學初等科第一年前期修身口授の用小供たるものなり。

一兒童の初めて學ぶ就くものち未だ文字を知らざるもの多きが故に修身の學科の如き唯教師の口授のみに止まるといへども書中記する所の古語俚諺等ハつとめて是を暗記

小學修身書

首卷

文部省

せしむべし。但し其前ふ記したる小引を。暗記せしむべきものふ非ず。

一書中何れの語を口授せんよも。かたは先づ其前ふ記したる小引の意をよく説き聞かせ。或は是ふ交ふるふ。忠臣孝子の傳記等と以てし。而して後其主とある所の語と擧げて。以てふきを斷ぎべし。然まごも徒らふ其語を暗記せしむるものふ意を用ひて。其心情の感動如何を顧ざるは。此科を授くる所以の意ふ非ざるなり。

一書中の語と授くるふ方り。便ふよりては。先なるを後ふし。後なるを先ふし。又は此他の古語俚諺等を用ふるも。固より妨げず。一法ふ拘りて。空しきを失ふとすべし。

一小學初等科。一期半年肄業の日數を以て。假りよ十七週。即ち一百二日と定めて。全編を編輯し。一卷を以て一期の用ふ充つ。本卷は。同科第一年前期。口授の用は供ふるものあれば。殊ふ字數行數を定めぬ。

小學修身書首卷

人としてい。穉き時より。父母不孝をつくすを以て。第一の勤めとせべし。父母不孝なるものい。自ら其外の事にも道あるものなり。

孝い。徳のもことなり。孝經

人の行ふべき道い。様々あまども。孝を以

て。尤も大切なるものとする。

人のむこなむひい。孝より大
るいなし。同上

故ふ常々親ふよく事ふるを心に掛けて。
暫くも忘るべからば。

なむのくすいふ。孝をおもふ。詩經

然まば何事とおきても親ふい禮をつく
し。且つ其恩を反きけい何るべからず。鳥

類ふも猶不斯くの如きと何りぞぞ。

はこふ。三枝のまゝいあり。から
すふ。反哺の孝何り。諺

父母我を愛したまふ時。忝く思ふい。勿論
のとなれども。たごむ我が事に就きて。怒
りたまふと何りこも。決して怨を怒るべ
からば。

父母。これをおいせば。よるこ

んでますき法。孟子

父母。これをふくまば。勞しそ
うらまはず。同上

不幸にして。父母亡せたまを。其情をつ
くして。之を哀むべし。

親の喪い。もこより。まづのら
はくをこまらるなり。同上

父母い。生前のこならぬ。死後ふ至りて。お

きを祭るふも。かあらば敬と禮をほく
すべし。

まつりふ。敬をたゆむ。喪ふ。哀
せおゆふ。論語

これをまつるふ。禮を以てす。
同上

父母の次ぎふい。兄弟姉妹など。身ふ近き
ものいなり。故に常々互ふ親しむつま

しくまぶきことなり。

兄ふよるしく。弟ふよるしく。詩經

兄弟すでふあへり。和樂しく。

りつたのしくむ。同上

兄弟姉妹い。大事ふ臨えてい。互ふ相扶け

ざるを得ざるものなれば。常よこれを

疎んずべし。

およそ今の人。兄弟ふ志くを

有り。同上

父母兄弟の恙なくして暮らば不ど。よふ

めでたきといなり。故ふかゝる人々の瑣

細の事ふ中たぐひあどして。其天幸を失

ふべし。

父母ともふ存し。兄弟ゆゑふ

きい。一のたのしくなり。孟子

父母ふ孝行をる心を以て。吾が

皇上帝を尊敬すべし。

孝を以て。君ふつこふまじす
なまぢ忠なり。孝經

忠臣い。孝子の門ふいつ。同上

皇室の永く榮えまこと常ふ心は願

ふべし。

わがまじい。およふやちよふ
まじ石の。以て不こなりて。

こけのむすまで。古今集

師ふ對してい。物事を包み隠さば。又其言

ふ逆らさず。慎みそ其教へを受くべし。

師ふつこふるふい。おのれと

なく。かくすとあし。禮記

友ふい。よき人を撰ぶべまことなり。よのら

ざるものい。友とすべのらば。

友い。その徳を。友とさるなり。

孟子

友ハ相互ハ其徳を助け合ふものあり。

友を以て。仁をたすく。論語

凡そ人としてハ。幼少の時より。志一を堅くして。學問を存すべし。且つ一たび學び多るとい。度々復習して。忘るることあるべし。

まなんで。時ふこれを存らふ。

同上

學問せざれば。如何に私智を以て考ふとも。見聞せざきゆゑ。誤りをふしやを。是學問の闕くべからざるゆゑなり。

たふして。まなばざれば。すふを。あやふし。同上

學問せれば。知ると多くなるがゆゑ。自

ら愚を去りて。智小就くやう小なるあり。
學をこのむい。知小あか。庸中
故小學者の。勉強ある上にも。勉強なるべ
きことなり。

人。一たびして。志をよよくす
まば。おのれ。これを百たび志。
同上

何すもま。朝とくおきて。つ

こめむや。まどふうま。き。あ
里何けの月。鳩翁道話

ま。て學問い。一旦出精まこも。忽ちこれ
を廢する時い。何の用にも立たぬまのあ
り。大方をやり氣なる人い。永く續きかぬ
るも多きものゆゑ。之を戒むべし。

そのす。むと。こきりのい。そ
の志りぞくと。すまやのなり。

孟子

我が未だ知らざるをい。明かふ知らざる
由をのべて。人の教へを乞ふべし。是則ち
物を知りたる人なり。

志らざるを志らばとす。これ
志るなり。論語

よく物を覺りしきまへ多るものい。却て
物知り顔をふさぬものなり。

おほきを以て。すくなきふこ
ふ。同上

能あるたのい。つめをかくす。
諺

人の言葉づつひを。うつくくまべし。言
葉の何しきい。聞き苦しきものなり。

言をいだすふ。章のり。詩經
一たび失言する時。最早取り返すのふ

らぬものなれば。物いふを慎むべし。

悪言。口よりいださば。小學

かりそめの言のを草に。のぜ

たちて。つゆの志乃身のおき

どころなき。心學道歌集

口數多きを戒むべし。口數多きものを。

人小嫌を。時小よりてい。是より禍を引

き出だすともあるなり。

多言い。衆のいむところなり。

小學

口を。わざをひの門。家語

まざをひい。口よりたはる。諺

我人小向ひて。道理小をむきたる言をい

ひかくまひ。人も亦道理よをむきさるる言

を以て。我小報ゆ。

言さこのつて。いづるものい。ま

たさかつて。いる。大學

人の惡事をいひつらなれものい。世人不
忌と嫌いるなり。

人の惡を稱するものを。ふく
む。論語

身しき身まで。上の人を嫉をそしるもの
も。亦世人不嫌をるなり。

下流ふるて。上をそしるもの

を。ふくむ。同上

人ふ對して。偽りをいふとすのれ。偽りふ
けまば。おそるてもなき故。吾が心。常は
安し。

いつをりの。かぎりなきせず。
人いたゞ。何りのまゝ。ふて。心
安しのれ。心學道歌集

言ふとい。成るべきだけむのへ。爲るとい。

成るへきまけ勉めて行ふべし。

事ふこくして。言ふは、しむ。
論語

其行ひを善くせんと思ふ。先づ其身を

は、しめて。輕々しき所行あるべからず。

身を敬まらるを。大なり。禮記。

善ま人といはるる程のりのを。其行狀皆

正しからざるいなり。

淑人君子い。その徳よこしま

ならず。詩經

行ひのよこし満ならずらんやうふせん

ふを。只其爲をまどきとを。爲さざるまで

のとなり。

そのたさざるよこさるを。たは

となり。孟子

まづれるふ。志たがふと存の

き。禮記

君子は。其行狀正しきゆゑ。自ら其容貌までも裕ふ見ゆるなり。

夫は。小君子をおもへば。温ぬるく。玉のごやう。詩經

徳は。身をうるかほ。大學

行狀正しからざるにあらざるときは。後小是を改めんと思ふとも。及び難し。

その徳を。つゝ。まぎれなく。ゆこいへごも。おふべけんや。書經

道ふ志さば。唯獨り居る時ふても。よく其身を慎むべし。

君子は。そのひとりをつゝ。む。大學

獨り居る處ふてい。空しからざるを爲

すとも。人々是を知るまぐと思ふ。淺を
のなる心あり。惡しきと何まじ。如何不隱
まとも。必ずあらはるるものなり。

かくきたるより。あらをれた
るいなり。中庸

中ふまことあれば。不のふあ
らなる。大學

あくぐ。千里をゆく。北夢瑣言

故ふ。少も其身ふあきとふまやうふ
し。ほことの人とならんと。心がくべし。
人おなき。人の中にも。人ぞふ
ま。ひとふなれひこ。人ふなせ
人。道二翁道話

過ちあらば。直ぐふ改むべし。直ぐふ改む
まじ。落ち度といならぬあり。

あやまちてい。あらたむるふ。

を。か。る。と。な。す。の。れ。論。語

あやまらちて。何らためざる。い
まを。あやまらちと。いふ。同上

いふ。一への君子。あやまらば。
かならば。これ。を。あらたむ。孟子

一たび。過ちたらん。ふい。よく。心。ふ。覺。え。お
きて。重ねて。過ち。な。ま。き。や。う。ふ。す。べ。し。

あやまらちを。悔。た。く。び。せ。ば。論。語

何やまらちを。を。お。て。非。を。ふ。す
と。な。す。の。れ。書。經

過ち。こ。知。り。て。猶。お。枉。げ。て。是。が。道。理。を。付
くるもの。い。甚。だ。い。や。し。

小人の。あやまら。ハ。かならば
か。ざ。る。論。語

ま。ぐ。て。非。理。を。ま。る。と。を。心。ふ。恥。づ。る。い。
さ。ま。し。き。徳。ふ。近。き。と。な。り。

ちぢを志るハ。勇にちか。庸中
其身小。少しも恥づるとなくバ。豈快きこと
ならんや。

あふひで。天小をぢず。俯して。
人小はぢ。孟子

人の我小對して。無禮なること。つうとも。務
めて怒りとおさへ。是をゆるはべし。

堪忍のなるかんにんハ。たき

もまゐる。ならぬらんまゐる。する
がかんふん。養草

おのまき善きこと。つうとも。人小向ひて。これ
と誇るハ。其心をきみたるものと。いふべ
し。

その能ふなられば。そのおの
るざしを。うらふ。書經

故小身を修むるものハ。務めて謙遜小を

べい。

みづつらひくしく。人をたふやぶ。小學

かきをさきふして。木のれとのちふは。同上

温厚なるものい。久しきふ堪へ。強暴なるものい。忽ち敗る。

齒いやぶま。あこい存す。同上

やなぎのえだふ。ゆきをなれいふ。諺

衣服飲食より。器財其外ふ至るまで。無益のものを好む時い。それよ心引られて。志し立ちかぬるものなり。

ものをもそへ何そべバ。あたるざしと。うしなふ。書經

其身富貴なりとも。人ふ高ぶり。又い華靡

有るを好むまのい。忽ち衰ふるものか
里。故ふ深くこれを戒むべし。

欲ハ。不_レいまふ_レま_レべ_レのら
礼記

おごるもの。ひさし_レのら_レ。
平家物語

人の道ハ。甚だ手近き處ふ在りて。且つ甚
だ行ひ易きものなり。

みちハ。ちのき_レふあり。志のる

ふ_レま_レを。こ_レなき_レよもこむ。
孟子

やうやくゆいて。長者ふた_レく

る。これを悌_レこ_レい_レふ。
同上

何事もよく思ひや_レりて。かの_レの好まぬと

を。人ふ推_レ付くるを_レなり。

おのま_レが。不_レつせ_レざるこ_レま_レる

を。人ふほど_レこ_レに_レなる_レ。
論語

わが身をつんで人のいたさを志ま。諺

我が身の事小非ざこもよく慮りて扱ふ時ハ大抵其人の心ふかなふものあり。

あたらずといへども。心なくこのらば。大學

未だ識らざる他人小對する小も愛敬の心なくいあるべからば。

四海のうち。まふ兄弟なり。論語

人ハ利欲の念を去るときハ心至てやま。分限の外の幸とのぞきて。心を苦しむべからば。

みま人の上小目がつきよまふゆく。あまのかふの。何をま世の中。心學道歌集

上まらば。たよをぬとの。おた

かりき。笑まざるくらしせ。おのが
心す。同上

物ごと。我が便利のそを計りて爲る時ハ。
かならば人ふ怨まらるるなり。

利ふよりて。おこなふを。うら
まわかし。論語

僅なる利益ふくらむ時ハ。大なる事を成
まふ妨げあり。

小利をこらまは。大事ならん。同上

まべての事。義理と見たらん小ハ。必ず勇
ま進みて。行ふべし。

義をみて。せざるハ。勇なきさふ
り。同上

人の善きと。あるを見ば。是を成しとぐる
やう小助くべし。

君子ハ。人の美をなす。同上

人より恩を受けたるを、わするべし。必ず是を忘るゝとなくして、其報をけゆるべし。

徳こそよくむくいざるをなす。
詩經

善きことをおせば、福來たり。悪きことを爲せば、禍來たる。

なんぢふいぢたるものいぢ。
んぢふかへるものなり。孟子

禍福門なり。たゞ人のまゝ福く
とあはるあり。左傳

いゝ程貧窮なりとも、善く業を勤むる時
を、其身終ふ豊かふなるものなり。

ちりつりりて、山こなる。諺

おのき自ら勤めざれば、いゝ程工夫すこ
も、仕合ひせよくなるの理あり。

まのぬたねい。をえぬ。同上

小學修身書 首卷 文部省

おのが盡くすべきことと盡くして後ハ富
貴貧賤共ハ天運ニ任まべし。
富貴。天ハあり。論語
天をうらまへば。人をこのめず。
同上

小學修身書首卷

定價金六錢七厘

明治十六年五月十一日出板板權所有届

文部省編輯局藏板

ハ大抵一日ニ二行半程ヲ授ク

但首卷ハ口授ノ料ニ供スル者ナレバ字數

行數ニ一定ノ割合ナシ

明治十六年六月

文部省編輯局

明治十六年六月 文部省編輯局

小學修身書首卷

定價金六錢七厘

明治十六年五月十一日出板板權所有届

文部省編輯局藏板

小學修身書

首 卷	初等科第一年前期用
第一册	同 第一年後期用
第二册	同 第二年前期用
第三册	同 第二年後期用
第四册	同 第三年前期用
第五册	同 第三年後期用

一期(半年)肄業ノ日數ヲ以テ假ニ十七週即チ一百二日ト定メテ此書ヲ編輯セリ修身科ハ每一日半時間ノ授業ナレバ其讀課ノ割合大略左ノ如シ

初等科第一年後期ハ大抵一日ニ一行半ヨリ二行^{十六字ヲ以テ}行トスヲ授ク但シ文勢ニ依リテ増減セザルベカラザルコアルハ勿論ナリ

同科第二年前期ヨリ第三年後期ニ至ルマデハ大抵一日ニ二行半程ヲ授ク

但首卷ハ口授ノ料ニ供スル者ナレバ字數行數ニ一定ノ割合ナシ

明治十六年六月

文部省編輯局

